

主 な 記 事

ブラジル便り(1).....	1
卓上独語.....	2
蚕糸・繊維化学の最近 の研究.....	3
会員の近況.....	5
母校だより.....	8

千 曲 會 報

1958年 3 月 1 日

昭和 33 年 3 月 1 日 発行

長野県上田市常入
信州大学繊維学部内
編集兼発行人 小 山 長 雄

信州大学繊維学部内
発 行 所 社団法人 千曲会

昭和31年 6 月18日第3種郵便物認可 毎月1日発行 定価1部15円

ブラジル便り (I)

谷 内 利 男

昨年2月2日神戸出港以来もう1年半も過ぎてしまいました。当地到着以来仕事は多忙を極め先頃まで休日は1日も取れないような状況で、いつもこちらの様子などお知らせ致そうと思ひながら御無音を続けてしまいました。

船中生活は比較的快適で太平洋を横切りロスアンゼルス、パナマ、クリストバル、パイア、リオデジャネイロ、サントスと北中南米の各港に寄港しながら目的地に参りました。パナマでは運河の機構や規模に人智の偉大さを偲び、兩岸を歩いている大トカゲや、色とりどりの熱帯植物等に異国情緒を満喫しました。各港々に上陸も許可されましたので案外面白い船旅でした。リオでは4日間碇泊しましたので充分リオ港や市街一帯を見物出来ました。見も知らぬ外国船員に盛場で御馳走になつたり、日本語の非常に達者なスペイン系ブラジル人と街で会い親切に案内を受けたりで想出の1頁が出来た訳です。さすがに世界3大美港の1つに挙げられるだけに有名なキリストの山や、ケーブルで渡るセムシ山等から見下す港の景色はなんとも言えない絶景でした。サントスで上陸、700余人の移民の人々と別れを告げサンパウロ市に参りました。サンパウロ市では私達を招いたブラ拓側の厚意で1週間ほど遊びましたが、街の様子は一寸東京を思わせるものがあり日暮の雑踏を眺めておりますと、スペイン系、ドイツ系、イタリア系、ポルトガル系等々混血児特有の美人連が胸を張って歩いており目を楽しませてくれます。邦人が多いので言葉には全然不自由しませんが。大きな外人の店には例外なく日伯両語の解る日本人二世の店員がおります。最近のブラジルは物凄い勢で発展しつつあるそうですが、外国資本の導入、企業の進出等サンパウロ市は日々新らしく動いている様子がよくわかります。

邦人の日本に寄せる郷愁の現われでしょうか、市内の陸橋などもお茶の水橋と呼ばれ、日本式料亭も沢山あります。来年は第1回の笠戸丸移民から50年に当たるとかで、目下50周年祭の計画が日本政府も乗り出して計画されている様子ですが、その熱の入れ方は想像以上で、強く意気込んでおります。この50年間に日本人のブラジルでの発展は大したもので政界には州議員、財界には南銀重役、農業、工業、実業等のあらゆる面で重きをなしている人々が多く力強い限りです。

サンパウロから汽車で西北700軒の地点にある目的地バストスまで参りましたが、途中見渡す限りのコーヒー園(カフェザールと云います)の緑や原始林にブラジルの広大さに驚きの目をみはるばかりでした。日本での汽車の旅はほとんど

町村の中を通りますが、それに馴れている目には一つの街を過ぎると何10キロの次の駅まで農園が青々と拵がついているだけの景色は、珍らしく映ると同時に、ブラジルへ来た実感が身に迫りました。

バストスはブラジルの各移住地中、もつとも邦人の多い集団地として有名であります。昔は、相当繁栄した街であつたそうですが、ブラジルでは土地に出来るだけのものを作り、土地が瘠せると他の肥沃な土地を求めて移つて行きますので、現在土地が瘠せてしまつたバストスはさびれた街になつております。しかし、養蚕、養鶏、ボンカン(ミカン的一种)西瓜の主産業と共に日本人の街としての有名さは失われておりません。街の様子は赤土の市街で、丁度西部劇によく出てくる宿場を御想像下されれば、その通りです。教育機関として小学校、中学校、商業学校、師範学校があり、ここでも外人に比べて日本人子弟の二世が優秀で、日本人優位を誇っておりますが、小学校でも落第は普通にあります。労働意識が発達している故か、皆働きながら通学しており中学以上、いや小学生ですらちやんとした職業を持つている者があります。市会議員兼ブラ拓事務員の大学生、レストランテ(食堂)主人の小学生、サンパウロ市へ出て事務所を所有している商業学生等々、日本とは大分異つた趣があります。働く場所が充分あるため親からの仕送りは皆無で、逆に親に送金しながらサンパウロへ遊学している人達が多く、教育制度については詳しく知りませんが、面白い国です。小学校3年(グルッポ)中学校4年(ジナジゴ)は坊さんがほとんど経営に當っております。カソリックの国でありますので、坊さんの勢力は大したもの。先生も日本のように神聖視されず、カーニバル(カルナバル)等には先に立つて乱ち騒ぎを演じております。

このバストスは日本人の集団地だけに、移民の人々の日本に寄せる郷愁は切ないほどで、街中日本より以上に日本趣味が漂っております。終戦時は敗戦を信じない人々が、臣道連盟や特攻隊なるものを作り、終戦を信ずる認識派の人々を邦人同志で殺し合つた所だけに、今もその空気は残っております。明治節には子供に晴着を着せて一家揃つて式をしたりする老人の旧皇国大日本帝国を偲ぶ姿には、笑えないものがあります。食事は肉食ですが、米、味噌、醤油、日本酒なんでも揃つております。外国品が沢山ありますが、高価です。日本のサントリー角ビンが1コト(5000円位)もしますので、手が出ません(ブラジルの貨幣単位はミル又はクルゼイ

ロで千ミル又は千クルゼイロで1コントになり、1クルゼイロは現在の為替相場では約5円になります。ブラジル製品は案外安くセルページャ(ビール)1本が15ミル(75円)ですが、私達が来た当時からインフレ傾向が強くなり、このビールも最初飲んだ時から3割以上の値上げで、全て生活が難しくなつて来ました。酒類の種類が多いこと驚くばかりですが、私には大変有難い次第です。しかし、何を食べて何を飲んでも日本のものと比べますと、呆れるほどまずく、日本の食品類が恋しく夢にまで見るほどです。

私の現在所属しておりますブラ拓製糸は、ブラジル拓植会社として植民地事業を主として、鉱業その他諸事業を一括している会社の一部門で、バストス工場はほとんど日本人ばかりの工場のため、成績もよく製糸部門ではもつとも重要な位

置を占めております。

ブラ拓製糸の生糸量がブラジル全生産量の6割を占めているのですが、バストス工場は座繰機(6条繰りで昔増沢より輸入したもの)200釜と自動機2セットで広大な土地を所有しトラットール(トラクター)数台で養蚕家の桑園手入その他の開拓を行つたりしておりますが、最近養蚕家が他の有利な職業に転向するものが多いので、ブラ拓直営の養蚕施設を作るため、目下大奮です。元々バストスもブラ拓の拓植部が設立した移住地でもあり、バックが強いので、何をすることも思い切つたことが出来る様子です。カミニオン(大型トラック)ジッペ(ジープ)等も数台所有し、サンパウロ州内はもちろん他州まで飛び歩くのですから、さすがブラジルは大まかなものだと思心させられます。(以下次号)

卓 上 独 語

鈴木 教 吾

化繊や毛製品の不況を対岸の火災視して、生糸の潜在需要が世界的に大だとか、5年後の輸出を17万俵(輪組を入れて)にすると、悠々閑日月の飲談を繰返しているうちに、自分の母家にも延火して、慌て始めた。32年の輸出総額は、前年比僅か2%の減だが、今年1月のそれは実に37%の激減である。それに1月末の在荷は、政府所有も加えて、前年比15%の増加だし、1月中の入荷が前年比2千俵も多いのはどうした事か。

産繭額も3百万貫生糸換算3万俵の増加だ。内地機屋は操短休業の続出で、生糸消費の激減は当然だろう。米国だけについて見れば、昨年中の日本生糸輸入は、一昨年比129万俵、25%減だが、絹製品の日本よりの輸入は生糸換算112万俵の激増で、数量的には略々相補う程度だが、生糸・絹製品合せての手取外額は、3百万ドル増となつている。絹業大会の問題になつたのも宜べなるかなだ。が、今年はそうは問屋も卸すまい。既にその傾向ははつきり看取される。

それにしても、糸価安定施設が出来ていたのは、有りがたい。しかも今年の先行きを懸念してか、政府買上げ資金を更に20億円増加し得る仕組にしたのである。

ところが、長い間自由主義の申し子だつた、化繊や毛製品も、遂に背に腹は代えられず、その意気地なさを嘲笑していた生糸を真似(?)てか、それぞれ輸出振興会社と言う立派な名称で、2億円ずつの業者出資で、買取機関を設置し価格の安定に乗出した。だが、蚕糸業もこちらが先輩などと威張らないことだ。

蚕糸関係の予算案は、最終査定で今年度比8千7百万円増額されたこと大喜びだが、最初の要求額40億円に比すれば、1億1千8百万円と、1/4近い減額ではないか。それですら鬼の首でも取つたかの如く、飛んだり跳ねたり大喜びしているの

だから、あきれざるを得ない。要求額は何れも緊急欠くべからざる費目な筈だ。大蔵当局が不用意にこれを認めた場合を考えて見給え。然し、それは何も農林蚕糸関係のみではない。それは官僚機構とか日本の議会政治とかの真の姿か。

圧力団体を総動員して、文字通り強奪した国民の血税がどう使われるか、敢えて“不正者の天国”を例に取るまでもなく、勤務時間中に野球応援にいつて、事務所は空っぽだつたり、午後2時になつても、面会人を待たして碁や将棋をやつていたり、年度末に残つた旅費を使わねばならないと、不要不急の出張が続出したり、こんなことを列べると“野暮な奴だ”と笑われるだけだが、それにしても人民の代表になる議員諸公が、一列になつてこれを助長しているのだから、また何をか言わんやだ。

かつて日独通商協定のため、西独から来た人達を京都大阪に招待したことがある。夜の宴たけなわになると、隣席の人が“多額の経費を支出して吾々を派遣した政府は、よもや2日間もこうして遊んでいるとは、想像もしていまい。こんなこと申してはなはだ失礼だが、然し東京に帰つたら昼夜兼行必ずこのブランクは埋めるよ”と何々大笑されたことを忘れない。そうした心構えは単に官僚だけではあるまい。むしろ“官僚すら”であろう。眼薬にもならない話だが。

生糸の“潜在需要”と云うが、今の若い人達には、果してどうだろう。それについて幸田文さんが、或る雑誌で言つたことを思い出す。“体に絹のくつついていところが暖かくて、ふつと離れてもういつべんくつつく時に冷たさを感じる。それに非常に性慾をかきたてられる。”こんな敏感な洗練され切つた感覚は、露伴以来2代にわたる純江戸つ子の修練の結果で、田舎者や今の青年男女には、到達し得ない境地だ。それは国際的にも真理だろう。

会 費 はむりに振替を用いないで、気軽に封筒に現金をほうりこんでお送り下さい。会報受領の日と俸給日には会費をお忘れなく。

蚕糸・繊維化学の最近の研究

—新刊書紹介—

昆虫病理学

青木清：技報堂KK, pp. 493. ¥1000

著者青木博士は、農林省蚕糸試験場病理部技官であり、蚕糸状菌病の最高権威者であることは周知のことである。これまでに「昆虫病理学」なる著書はない。即ち「蚕体病理学」はあつても「昆虫病理学」はなかつた。しかし蚕病の研究が進むと、どうしても他の昆虫疾病との関係が問題になってくる。それは理論的にばかりでなく、蚕病の実際防除からみても、その伝染源となる野外昆虫の疾病を問題にしなければならぬからである。その関係は、稲や桑の病気を、ひろい「植物病理学」の中で扱わねばならないのと類似している。この著書は、本邦最初の「昆虫病理学」として正しく画期的である。行間に、誠実明敏な著者の人柄をうかがうことが出来る。なお、益虫保護の立場のみならず、害虫駆除の観点からも問題を扱っている。

内容は糸状菌病の記載が全体の8割以上をしめ、細菌病、原生動物病及びウィールス病の比重が小さ過ぎる感があるが、著者の専門が糸状菌病であることのほか、昆虫病理学としては糸状菌病の研究が最も多岐にわたっているからであろう。巻末に725部の文献題目が収められ、研究者に不可欠な参考書の内容を具えている。

奥附上段の著者略歴の項に、1945年「桑樹胴枯病の発生機構に関する研究」により農学博士授与、1947年「蚕桑の病原糸状菌に関する研究」により日本農学賞受賞、1955年「緑膿病防除の研究」により農林大臣賞受賞、1957年「蚕の硬化病防除に関する研究」により貞明皇后記念蚕糸学術賞受賞など著者の輝かしい学績の間に、1956年信州大学講師兼任現在に至るとある。これは本学部で佐藤利一教授御退官後の蚕体病理学の講義をお願いしているからである。(松尾)

家蚕の眠性および化性の

生理遺伝学的研究

—成長におけるホルモン拮抗現象新説—

Physiogenetical Studies on Moltinism and Voltinism in *Bombyx mori*: A New Hormonal Antagonistic Balance Theory on the Growth.

諸星静次郎(1957)日本学術振興会発行、丸善取扱、A 5版 pp. 202 ¥900

著者は1957年度本主題によつて蚕糸学賞をうけられた。本書はその内容を海外に紹介するために、文部省刊行助成費の応援をえて発行されたものである。全文英文よりなり、4篇19章、引用文献220篇を数える。英文はヘッカー先生がみられた由であるが、きわめて明快でわれわれにとつては幸いこ

の上もない。ヘッカー先生(北大講師)は専門は独文学であるが、英語学にも定評があり、その一語もゆるがせにしない性格は有名であるので、このような人にもて頂いたことは論文の品位を高め、その斬新な内容とあいまつてさだめし海外学者の注目をあつめることであろうと思われる。おもな項目をしるせばつぎのようである。

I 環境による平衡現象

眠性・化性と環境、自己調整現象、幼虫にたいする環境作用、卵黄の量と成長

II 遺伝子による平衡現象

♀と♂の相対成長、眠性の研究、化性の研究

III ホルモン拮抗平衡よりみた生理遺伝学的諸問題

眠性と化性からみた系統の特性、中令幼虫の限界点、2令幼虫の令期の短い理由、自己調整機構による眠性・化性の變化、催青温度による性質の變化、優位性の交代、♀と♂の相対成長

IV 遺伝子作用と実用形質に関する考察

3種の遺伝子作用、変異とヘテロシス、光週律、昆虫の性分化、養蚕の意義

生物の生活現象はすべて平衡への推移過程であることに異論はない。たとえば単純なある刺激が与えられたとすれば、それと同じ量の反応系列が生体内に生ずる——つまり動的平衡——にみちびかれるわけである。これをホルモン、主としてアラタ体と食道下神経節の作用の拮抗平衡によつて解析を進め、成長の様相を凝視したというのが本書の主意であろう。とくに蚕学者の一読をすすめたい。(小山)

応用色染学

会田源作：繊維技術研究社発行、pp. 300, ¥750

一つの新しい合成繊維が出現するたびに従来の染色技術では加工が困難となつて新しい技術が発明されてゆく今日において、染色加工業にたずさわっている技術者にとつても、優れた色染学の参考書が出版されることは、深く待たれているが「理論と実際」とをかね具えた書物は殆んどみあたらなかった。この時に会田教授が長年に亘る真摯な研究と深い経験によつて書かれた「応用色染学」が出版されたことは、ひとり染色界だけでなく、繊維加工に関係しているものにとつてもよろこばしいことである。

内容は、染料の繊維への染色機構など理論的な面から、各種属染料の一般的性質、染色方法等実技術にいたるまで広範囲に亘つて詳細に載せてある。特に化学繊維、交織物の染色助剤等についても触れている。

概観すると、色染化学に関係する技術者、研究者が当面する困難な問題の解決や、指導に極めて有益な書物であると思う。(三石)



もし識るあらば

林 貞 三

佐久間象山先生の書「倘有識」の額を私は持つているが、読みも意義も判然としなかつたのを、金沢大学の朝倉保平先生(青木村出身)によつて23,4年振りに解かれた。即ち古くからの中国語で現代でも文語的に書かれたり言葉としても用いられている「タンヨウシュウ」で日本的に読むならば「もし識るあらば」と読むが良いとのことだ。識るあらば判るだろうと、あとは相手方の悟るにまかせる云い方で、識は単なるアンダースタンドの意でなく、人物をしるの意だと云う。

家には象山の屏風や軸物数点あるが、額面がないので一点欲しいなと思つてゐた。恰も昭和10年の春、長野の長谷川君が此の額を持つて来た。猪坂(直)君、佐藤(嘉)君等が居合せた折だつた。60円で買取つた。読み方は人偏があつてもなくつても偏は尚だよ位で受取つた。当時木町の狭い家には掛ける場所もなく放つて置いたのを、今の住居に移つてから飾りつけた。昭和16年と思う。神戸生糸検査所長田口敏夫君が見えた時、2人で有識は尚しとは平凡過ぎるぞと云う事になつて、始めて群林を引いて見た処が驚いた。偏は祥に通じサマヨウ、マヨウ、と判つた。一転してもの知りは迷つて何も出来ないと解し、大いに吾が意を得た心地になれた。かくて10年近く過ぎた或る日上田第1回の卒業生で、父親に漢学者をもつ松村季美君が来られ、「識有るに倘ふ」か、「識は名詞になるかなあ……良く調べて見よう」と云われたのに、水をさされたような感を覚え、それから幾人かに尋ねて見た。鈴木教吾君も上野の図書館へ行つて調べて見ようと云われた一人であり、松尾高校の竹内先生も松代の羽田先生(象山の研究者)に尋ねましようと思つたが、誰れからも返事が来なかつた。

偶々朝倉先生が信州大学より金沢大学へ来転される際、私も調べましようと思つてメモされてから1カ年余り、昨昭和

32年7月5日に解答してくれ、上記の如く「もし識るあらば」と判つた次第である。勿論私の喜びは一通りでなく、前記の諸君にも早速お知らせした。

ほんとうに象山先生は偉いと思う。当時ラテン語や英語ばかりでなく、支那語も自由であつた事がうかがわれる。そうして「タンヨウシュウ」は右顧左眄と凡そ裏腹の言葉で、いちいち説明したり弁明すれば誰れでも判るに決つてゐる。そんな暇のあるべき筈がない。「しる人ぞしる」として、どしどし断行された、そのキ然たる先生の態度こそ、先生があのあたり見えるような気がする。

先生は西欧の学問技術に驚き、我が国も速かに開国して之れを取り入れなければならぬと、幕府を説いたばかりでなく、吉田松陰の渡航を計り、ために先生は投獄されてしまった。のち先生は遂に京都で尊王攘夷論者のために暗殺されたのである。

この安政の大獄時代に書かれた「倘有識」こそ、先生の心境を卒直に示すもので、心から敬意を表する次第である。

思い出の寄生木

静岡県

十九楽吐月峰

△「まえがき」の前書

永い間、週刊朝日が各層多数の読者を引き付けた名篇「新・平家物語」があつた。又昨冬創刊された雑誌「日本」が同じ人気作家を煩わして「新・水滸伝」を小説欄に掲げ出した事は、正にヒットと云うべきである。所で惟うに吾々年輩の者の少年時代の巖窟王、中学時代の徳富蘆花の「寄生木」は夫々今以つて忘れ得ぬ名作であつた。この頃も思い出すままに読み直して見ても改めて感銘させられる事に変わりはない。私は依然たるファンである。解説者笹淵友一氏の言う通り「寄生木」は、飽くまでも蘆花の作品であつて、小説ではない。篠原良平の原文を蘆花がその一流の筆致を以つて書き綴つた作品と謂うべきであるが、主人公の良平と可憐な夏子の純情にして波乱万丈の全生涯は、純潔なる悲恋史として同情の涙を禁じ得ぬものがある。

今時の軽薄な青年男女の交際交渉を種にした邪恋小説などに比すべくもない。桜の花と蛇イチゴの花の大差である。

この清き「作品」寄生木を一流作家の手で「小説」寄生木の名篇に著作したならば、高尚な洋蘭カトレアの艶美とふくいくたる香気を発散して、全日本の大衆読者の血を湧かすであろうことと、素晴らしい人気小説に一躍ノシ上ることに間違いない。何処かの雑誌社の企劃実現を期待して止まぬ。

◇まえがき

「前書」のまえがきの主旨は前記の通りできてまえがきに移る。思うに人生は凡て何物かの寄生木と謂うべきではあるまいか。甲が友人乙の家に下宿して共に学校へ通学するのも、甲は寄生木の主人公である。丙が親父の実家へ居候させられるのも亦寄生木である。寄れば大木の下と言う格言があるが、木の大か小かの差はあるが道理は同一である。あながち良平と夏子の二人だけが寄生木の特権者では断じてない。又人気有名作家の書いたものでなければ、寄生木の小説は出来ないと云えないと思う。

そこで無名筆者吐月峰山人は、このロジックを裏付けて見ようと発心して稿を起す次第で、巧拙は言う勿れ、2人でも3人でもこの趣向に賛同してくれれば望外の喜びである。

次に今1つ申し述べて置く。古来悪妻は60年の不作と言う言葉があるが、之では全女性は浮ばれないではないかと一応同情する。家内から云わしむれば、亭主関白と雖も、浮気心が多いとか、グズで出来が悪ければ悪亭主は60年の不作となるべきだ。吐月峰山人はこの後者をマナ板の上に乗せて見るのである。この男、亭主関白こそエエ迷惑であるが、後学のために忍んで貰わなくては無名筆者の小説寄生木は陽の目を見ないことになるから勘弁して頂く外はない。

◎「思い出の寄生木」の筋書予告

第1篇 60年の不作

第2篇 60年後の平年作

第3篇 70年のx作

以上の連続予定であつて、青壮年の仮の恋語り、よろめきの寄生木の数々、蚕糸業の隆衰、上田蚕専当時の雑記録、先生連の棚下し、学生某氏等の遊蕩行状記、卒業生の月旦記、ある蚕屋種の小僧、番頭の表裏などをあしらつて、笑われたり叱られたりして見ようと思う。

吐月峰山人もそろそろ人生の終着駅墓場もそう遠からじと感じるので、筆勢を早めて急ぎましよう。(32.1.15)

上田の思い出

旧剣道師範
小 沢 丘

私は埼玉の生れだが、福島県磐城高校から上田に御厄介になつたのは、確か昭和2年と覚えている。駅を降りて学校の所在地を聴くと、「ああ専門ですか」と教えてくれた。上田と云えば専門、専門と言えば上田で左様に有名だつた。其頃校長は針塚長太郎先生、教務課長が阿形輝司先生、井上柳梧先生が養蚕科長、製糸科長三谷先生、紡績科長が石倉新十郎先生だつた。遠藤保太郎、佐藤利一、佐藤春太郎の諸博士が、それぞれ研究室にデコと構えておられた。蒲生先生、林先生、樋口先生などが突出したところで、続く窪田潤、田中助教授、萩原清治、野口新太郎の諸先生が新進学徒として将来を嘱望されていた時代だから、相当古い話だ。私が今年57才になるから当時は25位だつたと思う。

針塚校長は偉大なる教育者だつた。柔剣道にも大変熱心な方で、毎年の寒稽古（朝5時から実施）も欠かしたことがなかった。柔道部長は岡徳次郎先生、師範は岩崎喜三郎先生だつた。

剣道部長の和田仙太郎先生が又稀に見る人格者で、率先して道場に出られた。殆んど全職員、全校生あげての寒稽古であつた。東京あたりと異なり上田の朝5時と言えば文字通り雪を踏んでの猛鍛練で、一寸見られぬ壮観である。物理の原田先生も剣道に御熱心で、細い目をして一番に面をつけ初2段の学生と負けず劣らずの激戦を展開されるのを思い出す。学生課におられた後藤健雄先生（陸軍少佐）も余り上手ではなかったが、よく出て来て指導された。同先生は実によい人だが、アルコールが入ると蛮声を張り上げて蒙古節などを歌い出す面白い人だつた。私は同職だつたので色々指導して頂いた。生徒監は岡先生、続いて古谷先生で直接の上司だつたから印象が深い。古谷先生は奥さんが妻の同窓の先輩だつたので何彼と御指導を仰いだ。特に妻が妊娠中などは時々来られてごまめや白魚をたべろ、さけは骨まで喰えと教えてくれた。先生は釣りが大好きで、先生から獲物を度々頂いたものだ。

上田には刀に明るい先生が多かつた。針塚校長、大滝照太郎先生、和田仙太郎先生等は皆大家であつた。就中大滝教授は其の道の第1人者であつた。是等の先生方から、刀を通して大きな教育を受けた。和田先生は私の生涯の恩人である。技術の指導は受けなかつたが精神面の指導を受けたことは誠に大きい。先生がなかつたら私は範士にはなれなかつたと思つている。先生は私に、「剣を学ぶ者は山に登れ、歩け、そして古聖賢の書を読め」と常に教えられた。そこで私は日曜毎に太郎山、小牧山、米山城趾などに登つた。時には井上先生や和田先生の御伴をして浅間、八ヶ岳、美ヶ原、御嶽、北アルプスにも足を伸した。今日各スポーツで所謂トレーニングということがやましく論じられているが、結局脚力を強くし、自由なフットワークが出来ること、心臓を強くして長期に堪えること、身体を柔軟にするというトレーニングのポイントを30年前に私にコーチしてくれたのは、実に和田先生である。身長5尺3寸3分、体重14貫7百という貧弱な私を、何とか1人前の剣士に仕立てようと努力された先生の誠意には涙がこぼれる。先生は仏語、英語を専門とされたが、元々会津の士で烈々たる気はくが満身からほどばしついていた、見るからに古武士の概があつた。

私は上田で結婚し長男保（東京文理大教育学部卒）長女愛子、次女好子（共に嫁して各々2児あり）は、上田で生れたという関係で恩縁浅からぬ土地である。従つて上田繊維学部は私の母校の様な気がする。全く第2の故郷である。

世は科学振興の時代となつた。開校50年を迎えて、内容益々充実し、卒業生には学者、官吏、経営指導者、教育家が輩出している。昭和33年は上田の学園が脚光をあびて活躍する年であることを信じて疑わない。私は繊維学部の発展を心秘かに祈りつづける1人である。切に発展を念じ、恩師並に学友諸兄の健康を祈る。

（筆者、警察庁剣道主任指導官、警大教授、範士）

お願い よせがきは凸板にしますので、インク書きや写真複写のものはぜったいご送附下さいませよう
お願い申し上げます。

会員の近況

安筑支会総会

安筑支会総会が去る1月26日に浅間温泉玉の湯で開かれた。

同支会今次の総会は山崎前支会長が北信支会へ転出されたのでそれに伴う支会役員の改選及び母校50周年記念事業寄附募集に関し支会としての具体的対策を検討すること等が主目的であつた。本会から野口理事長が出席し、尚前支会長山崎氏も特に北信から出席され、又賛助会員早乙女新一郎先生の姿も見え、当日の出席者は20数名であつた。

総会は午後2時開会、まず鈴木支会長の開会挨拶、中村幹事の会務報告があつて後、野口理事長から本会としての会務報告、本会から支会に対する要望、50周年記念事業計画の説明等行われ、更にこれ等に対する質疑応答などあつて後議事に移り、新役員には支会長鈴木玄九氏、副支会長に井沢喜三氏及び山崎勝巳氏が選ばれた。次いで会費集金に関する件、50周年記念寄附募集に関する件等につき支会としての具体的対策が極めて熱心に検討され、又其間に本会に対する要望等も協議された。議事は終始極めて熱心且建設的で実に立派な会議であつた。これ等の議事が終るや直ちに懇親会に入り、酒も御馳走も豊富だつたし、その上浅間温泉廻り抜きの美形も参加して、伊那節安曇音頭等なかなかの盛会であつた。

さて安筑支会の活動振は、この両3年来とみに活発を加え、例えば会費の納入状態など快心のカーブを以て向上の一途を辿っている。斯る活発な雰囲気は会議の間にも窺われて誠に頼母しい会合であつたが、それにしてもこの様な大支会の総会にその出席者20数名とは、今その躍進を期待されている支会だけに残念に思われた。目下千曲会は会を挙げて同窓精神の昂揚や、会の刷新に邁進しているのであるが、これ等は総てまず会員が諸会合に出席することから始まるのである。本支会を問わず、総会等の出席率さえ良くなれば、千曲会は自然に強化され同窓精神はおのずと昂揚されるのである。地元県に於ける有力支会として特に躍進を期待されるので、敢えて一言希望をつけ加えた次第である。この上の発展を乞ひ願つてやまない。（野口）

群馬支会総会の記

山口定次郎

千曲会群馬支会は旧臘15日(日)支会長小山清さん(糸11)の経営されている前橋市の交水社で開かれた。当日の出席会員は約40人で、会長はじめこの地方の知名の士が多くまことに頼母しい限りであつた。婦人会員3名も加わっていたのも異例である。

午後2時半、小山会長さんの開会の挨拶と、上田での総会報告にはじまり、目崎幹事長の支会事業報告、会計報告等があつた。私は本会11月総会の模様と、特に母校50周年記念事業計画や記念事業資金募集につき報告と御依頼をいたし、又母校近況につきお話しをした。尚支会としては、支会員名簿作製のこと、会費納入成績向上につき熱心に協議された。

又浜井寿夫さん(蚕2)の感謝表彰の式が行われた。之は永年群馬支会の幹事長として奉仕され、会員間の連絡や、会費収納等に多大の尽力をされたこの大先輩に対し、その功労を讃え、感謝の意を表されたもので、感謝状と共に、記念品として自転車一台を贈呈された。続いて浜井さんの感激の挨拶があり、列席の私達一同何ともいえず心温まり、目頭の熱くなるのをおぼえた。

又、この日の「呼びもの」としては第一物産株式会社繊維部長で第一線の活躍をしておられる杉山一雅さん(糸16)のニューヨーク絹業大会出席の最近の土産をばなしがあつた。欧米における最近の絹業事情を独特の観点からながめ、絹に対する非常に明るい将来を語られた。その他、こぼればなし、うらばなしなど功妙な話術に時を忘れ、興味深く承ることができた。

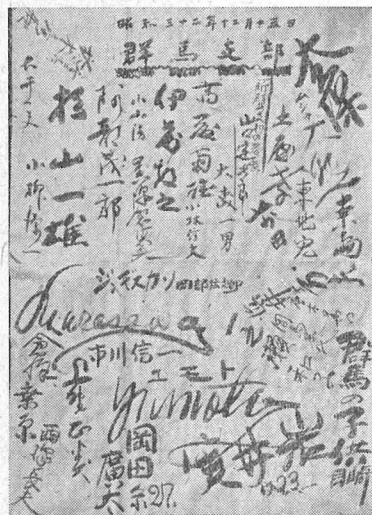
閉会後は交水社近隣の集會場で懇親会が開かれた。呑むほどに、酔うほどに意気大いに昇天、別掲よせがきも、終りに書いた人程、名前が大きくなっているのを見てもわかる。群馬はもともと針塚先生の御出身のゆかりもあり、千曲会もいつも盛んであるが、この日も参会された方々の殆ど全部が私の旧知の人々なので実に力強く楽しい会であつた。その夜は別に要件があつたので、小山、土屋及び黒沢の御3人に案内され、〇〇氏宅を訪問したが、暫くして帰つてみたら、まだ大い

に怪気焰がもえていたので、恐れをなして引返した(?)程であつた。

その夜は東片貝の黒沢副会長さん(糸16、生糸検査所長)の蕭洒な新居に案内され、奥さんや御嬢さんの温かいおもてなしに甘えて、大変の御世話になつた。

翌日は県庁内各課をまわり、市内、伊勢崎等各方面を訪問、挨拶や就職依頼に歩きまわつた。この度は会長小山さんをはじめ、土屋孝(糸15)、黒沢要彦、浜井寿夫(蚕2)、目崎武美(蚕26、幹事長)、幸島新一郎さん等みなさんには特別に御世話になつた。この紙上を借りて感謝を申し上げる次第である。

当日の出席者は、寄書きをもつて御判讀いただければ幸である。



三重支会の再建総会

1月16日三重支会から支会総会を開くにつき、本部から役員派遣方の通知があつて、17日に理事長から小生に出席するよう指示があつた。総会場所は18日午後1時、鈴鹿市白子町の亀山製糸健康保険組合保養所と云うのであるから、当日夜行で上田を出なければならぬので面喰らつた。

実は倉沢顧問が停年退官を3月に控えていて、亀山製糸とは格別昵懇の間柄であり、是非退官挨拶に行くとの御意向もあつたので、丁度よい機会であるから倉沢先生の御出席を小生から願つたが、余り急なことなので後日の機会にと云うことになつたのである。

仕事の段取をつけて夜行に乗つて早曉名古屋に着くと、10cm程の雪景色であるのに驚いた。会場への道順不案内なので、ひとまず亀山蚕種所を訪れた。金崎

所長を始め水野さん、田中さん等数人の同窓生に久方振りに御会い出来た。

たまたま白沢さんが見えられたが、総会には出られない由、母校の近況など聞かれた後に人一倍同窓思いの白沢さんは支会再出発の構想を話してくれた。その情味に溢れ常に適確な判断のもとに指標を示して下さることに感激し、敬服したのである。

やがて金崎さんの案内で、会場に行つた。会場は県下で有名な海水浴場の別荘風な館で、裏庭の白砂をへて波静かな伊勢湾を一望のうちに臨められる。炬燵に入つて窓外をみれば、この地方には珍らしく雪が舞っている。今年は上田では殆んど雪をみなかつたので、寒い信州から暖かい鈴鹿に出て炬燵にあたつて窓外に雪をみるのは、奇妙な感じだつた。

篠田支会長が定刻に遅れて見えたと頃には、亀山在勤の若い者がすでに懇親会の設営まですませて幹事役の辻本、田中両氏が気をもんでいた。

支会員60余名中24名の出席であるから盛会である。それは昭和25年以来7年振りの会合だと云うことであるから、その間の世情の変転にきざして覚めた同窓愛のしからしめたためかもしれない。

支会長の挨拶に会が始まり、自己紹介を終ると、支会長は母校50周年を迎えるに当り、当支会の再建を期し、それにふさわしい活動的な長を選んて欲しいと辞意をもらせば、佐藤、田中の大先輩ほか数人が同調、活動的な人と云うことで支会長指名で白井さんが新支会長に選ばれる。

それから小生は他支会も再建組織化の進んでいること、母校50周年記念事業のこと、本会会計のことなどを説明すると共に事業の完遂と、会費納入について御協力を要請した。

結局当支会も新支会長のもとに、科別地域を考慮の上7名の幹事を選び、幹事長に辻本さんをたて組織化が完成した。即ち四日市、鈴鹿地区2名、亀山地区2名、津市1名、南西地区2名と云うわけである。近代的工業都市として急速に発展している四日市の紡織工場には会員が多いが、青木さんが代表して馳せ参じ、土、日曜日といえども勤務の関係で揃つて出られないのが残念だから、今後開催日を考慮してほしいと、意気のあるところを示した。

県下の道路網や都市計画事業に破竹の隆盛振りを発揮する三重農林建設KK社長の白井新会長は、50周年記念事業資金

でも会費でも今後は他支会に負けないと力強いところを示してくれて嬉しかった。7名の新幹事は何れも一騎当千の士であるから、三重支会今後の活動は必ずやみるべきものがあろう。当日の出席者、新役員は次の通りである。

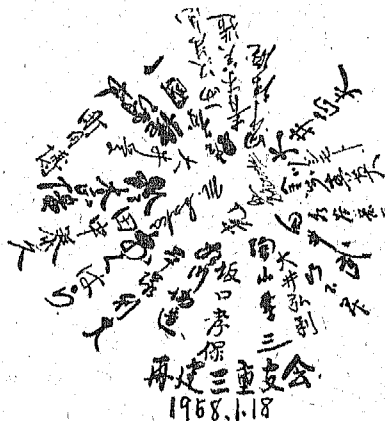
青木実造(紡21),奥原康佑(学化1),大井学(蚕6),大井弘利(蚕別),大井正夫(糸20),金崎真英(蚕9),坂口孝保(蚕17),坂求(紡9),佐藤國一(蚕4),桜井周一(農1),白井武(紡6),塩沢長(学蚕2),篠田平三郎(蚕1),鈴木正悟(蚕21),陶山専三(糸6),田中康雄(蚕4),田中奏久(蚕30),谷川梅造(蚕12),辻本勇(蚕19),西沢善徳(紡27),平塚利夫(紡学2),山下昇(蚕30),永谷宏三(蚕別2),山本十三(糸31)

支会長 白井武(紡6)
幹事長 辻本勇(蚕19)
幹事 鈴木正悟(蚕21)
青木実造(紡21)
田中奏久(蚕30)
山本十三(糸31)

他2名は後日選任。

末筆ながら同夜御世話下さった金崎さん、桜井さんに御礼申し上げますと共に、会員各位の御健闘を祈つて筆をおく。

(町田)



本 会 日 誌

2月8日 理事会開催、50周年記念事業の推進について研究をした。詳細は別掲の記事を見られたい。

50周年記念事業推進さる

母校50周年記念の事業内容予算等は、昨年の総会において決定され、その詳細は新年号にて、会員皆様既に御承知と存じます。

この記念事業の推進については、千曲会内に50周年記念事業実行委員会を設け、これにあたることも総会で議決されております。

2月8日母校千曲会館において、下記の如き議題で理事会(拡大役員会)が開催された。

議題

1 50周年記念事業委員の選出について

(1) 名称並に仕事の内容
母校50周年記念事業実行委員会
千曲会員を対称とする記念事業の寄附金募集及びこの事業の推進

(2) 人員及び選出方法
本部役員全員、支会長外各支会ではその支会の代議員数に応じた数の委員を各支会毎に選出
総計 165名

(3) 委嘱の方法
本部委員支会長及び支会選出委員に理事長より委嘱する。

(4) その他
実行委員総会を開催する。

2 記念事業の推進について

(1) 募金標準
(2) 支会割当
(3) 趣意徹底方法
(4) 支会に於ける募金方法
(5) 募金経費等についても審議された。

出席者 (順不同、敬称略)

野口理事長、山口定次郎、田口亮平、林貞三、中島進、北条舒正、町田博、山崎寿、和田晋、猪坂直一、大山融、小山清(代理黒沢袈裟彦)、坂口育三、白井美明、竹田寛、一之瀬匡興、北条五郎右エ門

投稿上の注意

原稿はなるべく原稿用紙に横書きにお願いします。数字はすべて算用数字にして下さい。なお原稿のかなづかいには当方で現代用語に訂正しています。あしからずご諒承下さい。

須田圭二先生退官記念資金募集

すでにご承知のとおり、須田圭二先生には昨年母校をご退官になりました。

先生は大正6年上田蚕糸専門学校に在職以来じつに満40年の長きにわたり、分析化学を母体として学生の薫育や研究に真摯な情熱を捧げてこられました。先生のそれはいかにも地味な、あまりにも謙虚なものでありましたために、決して目立つものではありませんでした。しかし、私たちはそのような先生だからこそなおさら本当に何かしてさしあげなくてはと思ひまして、同志あいばかり、このほど微意をあらわす組織をつくりました。どうぞ会員の皆様におかれましてもこの趣旨にご賛同下さいまして底分のご拠出をお願い申し上げます。

拠 金 要 領

- ★拠出金 1口≒200、口数は自由
- ★送金先 千曲会内須田先生退官記念会(振替口座東京43341)
- ★締切 昭和33年4月30日
- ★資金贈呈方法 実行委員におまかせ願います。

昭和33年2月10日

須田圭二先生退官記念発起人代表

八木誠政

発起人氏名(順不同、○印は実行委員)

校外

飯島 正胤	小 登 晋	小島 五郎
佐藤良太郎	戸倉惣兵衛	林 新一
浜井 寿夫	藤原 卓之	曾山 直高
三橋 宜夫	白 沢 幹	山本三六郎
山 崎 寿	伊藤 力蔵	清水 衛敏
市村 真衛	倉沢 文夫	倉沢 恒夫
清 水 洸	滝沢 昌一	丸山 喜久
中島 正己	大井 秀夫	田中 茂男
高木 三治	堀 久三郎	小林 良亘
小松忠一郎	丸 山 裕	飯田 一郎
佐藤 雅久	宮本 庸治	田中 甲二
児平 文雄	浦山昭吉郎	菊 川 武
田中 嘉彦	吉沢 和弥	安田 けい
蓬田 クニ		

校内

伊藤 武男	小 泉 所	山崎 豊録
中 原 武	八木 誠政	天白 一馬
土屋 敦博	佐藤 良恭	小山 長雄
釜沢 弘実	横井 政時	蒲生 俊興
田口 亮平	山口定次郎	竹 田 寛
松尾 卓見	古平 福紀	倉沢 美德
町 田 博	関 博夫	林 貞三
荻原 清治	柳沢 延房	白井 美明
石 川 博	青 沼 茂	野口新太郎
小林 尚一	土屋 幾雄	大平 敏彦
坂口 育三	北条 舒正	遠藤 恒久
阿久津伊平	今井甲子男	若林 茂一

母校だより

△今春卒業予定の学部四年生、蚕糸別科生並びに専攻科は就職に学年末試験にといよいよ社会へ旅立つ準備で多忙を極めている。

就職について見ると各科主任の先生を始め学部当局の真摯な努力や、学生後援会、千曲会等の後援もあつて、養蚕、製糸両学科並びに別科は例年の如くその時期が幾分遅れているが、既に決定した者は70~80%に達し、卒業期までには全員決定の見込であり、紡織、繊維化学両学科は特殊事情による各1名を除き全員決定済みである。就職先は家庭事情等による県内の数名以外は殆んど県外であり、養

蚕製糸両学科は農林省を始め岩手、福島、埼玉、三重、愛知、福井、岡山等官庁関係の多いことが目立っている。紡織、繊維化学両学科は通産省関係の2、3名以外は全員会社で十大紡始め帝人、東洋レーヨン、ライオン油脂、日本化薬等一流会社へも相当行くことになつてゐる。尚これ等卒業年次の学生については学年末試験を大体2月中に終り、3月10日に卒業式を行う予定である。

△学生後援会理事会開催について
2月1日(土)母校会議室において学生後援会理事会を開催、学部側からも学部長、学科主任、補導委員等オブザーバーとして出席、明年度予算、定期総会の日取等について審議された。

特別活動資金受領報告

(頭書に(2)とあるは第2回醸出者)

(2月5日現在)

金1000円	尾藤 省三(蚕10)
	門 川 勇(紡15)
金900円	柳沢 千代茂(化2)
	土屋 貢一(化2)
	西沢 寛夫(化7)
金600円	池田 善三(蚕18)
	(2)寺崎 隆夫(紡19)
	山崎 光寿(化9)
金400円	山 本 浩(糸30)
	(2)阿良田 卓三(紡専)
金300円	羽場 清人(学紡3)

会 員 動 静

234→243	関 弥 三	学糸4	酒六株式会社甲佐工場(熊本県上益城郡甲佐町)
80→91	森 田 三 郎	糸 4	鎌倉市大町名越1830
199→216	高 橋 伊 作	糸 14	西宮市甲子園口4丁目133
108→238	細 田 増 郎	糸 30	郡是宇島工場 豊前市三毛門町大字杏川312
120→158	宮 堀 俊 雄	蚕 17	長野県養連長水支部(長野市南県町産業会館内)
149→162	西 原 淳 一	蚕 7	松筑地方事務所農地課長(松本市西堀町)
152→160	上 石 陸 二 郎	糸 29	長野県蘭検定所調査研究部長(松本市庄内町)
100→130	白 井 要 範	糸 12	自宅(小県郡丸子町長瀬)
203	福 島 米 雄	糸 38	旧姓米原、日本レイヨン宇治工場(宇治市)住、京都市伏見区柿ノ木浜町442
212→198	北 沢 隆 治	糸 35	亀山製糸室山工場(四日市市室山町)住、四日市市垂坂町635、昭23
153	清 水 利 男	糸 37	長野県蚕業試験場(長野市)住、長野市吉田広町 市営住宅22
61	荒 木 守 雄	学糸3	羽村中学校(東京都西多摩郡羽村町)
78→49	牧 崎 通 夫	糸 34	片倉工業富岡製糸所(富岡市富岡1)
56→150	花 崎 剛 行	糸33後	中野製糸KK工場長(長野県中野市大字中野1296)
162	依 村 昌 三	糸別3	旧姓村松
173	依 田 和 夫	学糸2	岡谷市成田町
169	小 林 宇 佐 雄	糸 38	勤務先前通り、(住)岡谷市岡谷区 中村甫助方
179	関 文 夫	学糸2	同 上 (住)岐阜県可児郡可児町下蕨土31
175	清 水 悦 雄	学糸1	天竜社本社工場(下伊那郡鼎町)
69	鈴 木 行 徳	学糸1	勤務先前通り、(住)東京都南多摩郡日里町西町3395
172	望 月 誠	学糸2	同 上 (住)岡谷市小井川区弥生町8478
68	清 水 茂 雄	学糸4	日本乾燥KK(豊島区池袋1の644)(住)新宿区柏木5の1112
89	立 木 悦 郎	糸 32	勤務先前通り、(住)横須賀市坂本町6の8
148→53	小 林 仟 治	糸 36	昭栄製糸本庄工場(本庄市2241)
80	峰 村 稔	学糸1	勤務先前通り、(住)東京都北区王子3の19 星野明方
132	玉 井 和 更	学糸1	同 上 (住)小県郡丸子町蘆川区石井 柳沢功方
83	和 田 重 盛	糸 35	(住)大田区萩中町33
66	小 井 土 基 博	学糸5	大和三光製作所(中央区京橋3の2)(住)川崎市諏訪2170 唐木恒雄方
90	丸 山 栄	学糸3	須藤製糸横浜出張所(住)東京都大田区馬込西3の21 森田方
159	小 沢 実	学糸1	長野県蘭検定所(住)松本市仲町1の404

編 集 後 記

75号が皆様にとどく頃は卒業式です。今年も又100余名の卒業生が、なつかし

い母校を後に社会に旅立ちます。母校便りにもあります如く、就職もほぼ決定しました。先輩の皆様所に又大勢参る事と存じますが、何卒宜敷お願いします。(一之瀬)

編集理事 田口 亮平
編集総務 小山 長雄
部 員 白井 美明 美斉津利正
西山 久雄 清水 周
柳沢 幸男 一之瀬匡興